

日経MJ 2017年 3月 / 日付

インド経済の大きな変化

IoTやAIの調査の政府ミッションでインドに来ている。私にとっては3回目のインド訪問ということ、何十回も訪問した米國や中国とは違って、本当に久しぶりの訪問だ。インド経済についてじっくり考えるよい機会になった。インドと中国を比べると、その経済成長のスピードの違いに驚くことが多い。



伊藤元重の

エコノオッチ

感じられなかった。この違いは何から来るのだろうか。両国の成長の自身を知る上でも重要なポイントとなるはずだ。インドの特徴は、1億人ほどの大都市の人口と、8億人を超える田舎の人口の違いだ。大都市では大きな変化が起きている。今回訪問したバンガロールにある米系大手企業のシスコの研究施設は、95年ごろは10人程度の従業員だったのが、今は1万人規模に成長している。シリコンバレーとつながり、米国の有名大学を出たエンジニアも多くいるこの研究所の技術レベルは、日本を超えるものがある。多くの若いエンジニアがIoTやAIの研究に専念していた。トップレベルの研究者が世界とつながり、研究活動が行われ

農村部8億人の所得増加

ている。一方で、8億人以上を抱えるインドの農村部の変化は非常に遅い。農村コミュニティの中で生活する多くの人は、都市に移り住まなかった。できなかったと言ってもよい。大量の人口が農村部から都市部へ移ったことが成長の原動力となった中国とは大きく異なる。中国は国全体が農村部から都市への移行の中で成長したのに対して、インドでは1億人部分の都市部は急成長したのかもしれないが、8億人を超える農村社会は成長から取り残されてきた。インドの成長が全体として非常に遅く見えるのはこのためだ。専門家の話を聞いていると、そのインド社会で大きな変化が起きているようだ。その原動力となっているのが、携帯電話やスマホの普及だという。これによ

って、農村社会が外の社会とつながりはじめ、多くの若者が農村社会から離れ、近隣の町で働き始めたのだ。農業社会ではほとんど金銭収入がなかったのが、近隣の都市で働くことによって、金銭収入が2倍にも3倍にも拡大した人が多く出てきているという。そのスピードはゆっくりであっても、8億人の人口の金銭所得が増え始めるということは、インド経済に大きな変化をもたらす。日本企業にとっても、このインド経済の変化は大きな意味を持っている。8億人の経済の胎動は、日本企業にも大きなビジネスチャンスとなるからだ。自動車やオートバイでは日本企業の存在感は大きい。こうした流れをより多くの消費財企業に広げることができればよいのだが。(学習院大学国際社会科学部教授)